

# 高知工科大学

## 「PROGテストを用いた教育効果の妥当性について」

高知工科大学  
マネジメント学部  
教育講師

酒井 良二



[2012年7月28日 東京リクルートGINZA8ビル]

### 1. PROGテスト導入の経緯

2011年トライアルでPROGテストをマネジメント学部の学生が受け、その結果大きな気づきを得られましたので、それを皆さんと共有したいと思います。

コンピテンシーの領域における教育効果を確認するために、何かいい気づきがないものかと考えていたところだったので興味を持ち、体験受験をしました。受験者数は1年生から3年生まで合計で207名でした。

とてもよかったのは、結果について個別にレポートをつくっていただいたことで、その説明会を開催しました。ここで学生に与えたフィードバックの影響は大きかったと思います。しかし、残念ながら教職員は関心があまり高くなく、もう少し関心を持ってもらえたらよかったと思います。

PROGテストのところで紹介するのは、私が講師をしている初年次教育「Study Skills(以降SSで表示)」を切り口としたもの、それから、キャリア教育の2つについてお話をさせていただきます。

### 2. キャリア教育プログラムの概要

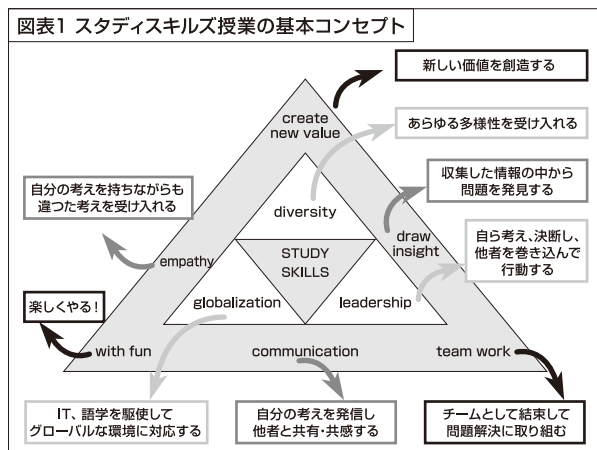
最初に、高知工科大学のキャリア教育プログラムは次のようになっています。

まず、1年生の前期にSSで、学ぶためにはどう学んだらいいか、という内容をします。2年生の後期の「キャリアプラン基礎」で自己理解を中心に学び、マネジメント学部の場合は2、3年生の夏休みにインターンシップを推奨して

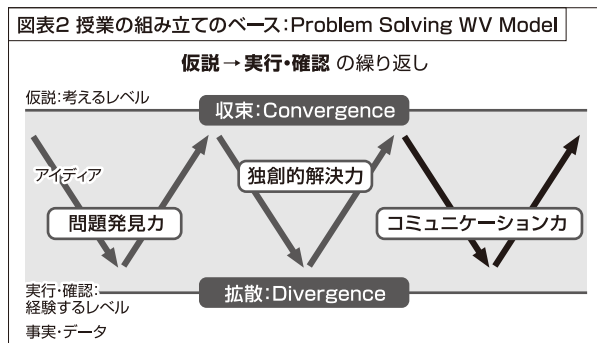
います。3年生になると通期の講義で「キャリアプラン1・2」があり、1は全学共通の講義、2はマネジメント学部の学生を対象を絞ったものです。このようなキャリア教育プログラムの体系になっています。

初年次教育においては、社会・企業経験講師により、専門教育の教員や大学職員とは別の切り口・目線で学生の人間力を高める教育をしています。

私の考えるSSの授業紹介です。基本的には9つのスキルを当てはめています(図表1)。「新しい価値を創造する」ために「収集した情報の中から問題を発見する」。それから、グローバル化の中で「自分の考えをもちながらも違った考えを受け入れる」。そして、アクティブラーニングのセッションが多いので、チームワークとそこにおけるリーダーシップ。そのあたりをメインのスキルセットとしています。最終的にはコミュニケーションと大学の学び。とにかく楽しくやろう、ということを切り口にしています。



授業の組み立てのベースは、Problem Solving WV Modelを中心に組み立てています(図表2)。グローバルな環境で活躍できる個性豊かな人間づくり、ということで、変化の中から問題を発見できる「問題発見力」、独創的な解決を生み出す「独創的解決力」、それを発信して他者と共有する「コミュニケーション力」の3つのコンピテンシーを中心に、仮説と実行、拡散と収束を行ったり来たりしながら、問題を解決し、共有していく。このような授業を組み立てています。



授業の中では28個のツールキットを学生に学んでもらうようにしています。ツリーダイアグラムやマインドマップなどで、拡大していくときはさまざまなツールを用い、また絞り込むときもツールキットを選びながら授業をしていく、という組み立てになっています。ベースになっているテキストは「A NEW AMERICAN TQM」です。

それからdiversityについては、各クラスごとのグラドルールを作ります。そこでは必ず一人が一つ「異見」を述べるということで、発表し、発表された異見はフリップチャートに落とし込みます。これを「Net Touch」という方法で、さらに話し合います。このように学生たちが自らルールを決め、最終的には各チームごと「グラドルール」を作ります。例えば1. 朝ご飯を食べて体調管理をして、授業には遅刻をしないように、やる気を持って出席する。2. 身だしなみなどのマナーを守って、挨拶を励行し、いつも笑顔で、みんなで協力して授業を盛り上げる、などです。決定した「グラドルール」は授業中ずっとホワイトボードに貼りつけて目に触れるようにしておきます。こういったことで、自分とは異なる考えを持つ学生とも共有・共感するベースを作っていきます。

以上、授業の一端の紹介です。

### 3. PROGテスト結果分析

#### 初年次教育Study Skills(SS)の成績評価・自己評価との相関分析

SSの成績評価と自己評価、PROGテストの結果、特にコンピテンシー部分についての今回の結果を紹介します。

まず、全学でSSの自己評価をしています。具体的には主体的に学ぶスキル〈①書く力、②調査要約する力、③他者理解・自己表現力、④問題発見力、⑤課題解決力〉と社会人として生き抜くスキル〈⑥自己の立場の理解、⑦自己をコントロールする力、⑧社会理解と自立心、⑨挑戦する力、⑩プレゼンテーション〉の10の分野を5段階で学生が自己評価をします。実施のタイミングとしては入学後の4月、ファーストクォータが終わった6月上旬、セカンドクォータが終わった8月上旬の計3回実施しています。

PROGテストとアセスメントの関係を見ますと、8月の最終的な自己評価とPROGテストのコンピテンシーの相関は比較的高いです。つまり、授業の効果を感じている学生のPROGテストのコンピテンシーの評価は高い、ということがわかります。

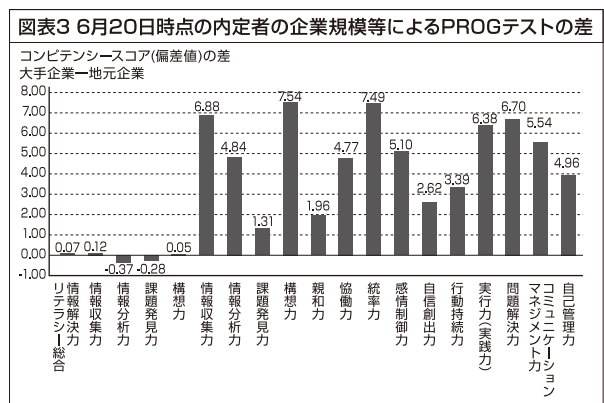
その他の切り口として、SSの成績を以下の点数におき

かえて、その結果とPROGテストとの相関を見ました。成績のつけ方は出席15点、宿題30点、プレゼンテーション20点、レポート20点、意欲的な姿勢15点です。やはりSSの成績とPROGテストをテストのコンピテンシーには相関部分が若干あることが確認できました。

#### PROGテスト結果と4年生の内定取得状況の相関分析

PROGテストと内定率の基礎数字ですが、今在籍している4年生115名の中には進学希望者もいますが、①分母をこの115とします。②PROGテスト受験数は53名46.1%、③内定取得者数67名で58.3%、④PROGテスト受験者内定数は36名で67.9%、⑤PROGテスト非受験者内定数31人で50.0%です。数字だけでも、PROGテストにチャレンジした学生の方がいい結果を得られているのではないかと思います。

6月20日時点でPROGテストを受けた学生の約半数が、一部上場の会社、またはその関連会社に内定が決まっています。残り半分は高知・四国など地元の企業です。そこで、大手等企業内定者とそれ以外の内定者のスコアの差をみました(図表3)。その結果、大手等内定者の方がコンピテンシーのスコアが明らかに高かった。これは採用のプロセスによるものではないかと思います。私はこの後、PROGテストの結果と学生の就職活動の結果がどのようなつながりがあるのかを考えたいと思います。



#### 4. PROGテスト解説セミナーに対する学生の反応

PROGテスト解説セミナーに対する学生のアンケート結果は図表4です。

まず、「これまで気がついていなかった「強み」と「弱み」について、新たな自己発見がありましたか?」という問いに、かなり多くの学生に「気づきがあった」という数字があり

ました。

次に「目標達成へのステップ作りの参考になりましたか」という問いには、「非常に参考になった」「参考になった」の合計が87%。

それから、学生のPROGテストへの期待として、「自分の基礎力を1年後にどの位高めることができたのかに関心がありますか?」の問いに90%以上の学生に関心があるという結果が出ました。

Q1.これまで気がついていなかった「強み」と「弱み」について、新たな自己発見がありましたか?	たくさん発見できた	少し発見できた	どちらでもない	あまり発見できなかった	全く発見できなかった	未回答
Q2.PROGテスト個人レポートは、目標達成のステップ作りの参考になりましたか?	非常に参考になった	参考になった	どちらでもない	あまり参考にならなかった	全く参考にならなかった	未回答
Q3.あなたは自分の基礎力を1年後にどの位高めることができたのかに関心がありますか?	非常に関心がある	やや関心がある	どちらでもない	あまり関心がない	全く関心がない	未回答

※数値は回答の割合

## 5. まとめ

6項目にまとめました。

①PROGテストのコンピテンシーとSSの成績評価との相関は、比較的高いと思います。これは我々が、評価が的確にできているかどうかの大きな検証になったと思います。

②同様に学生自身がやっている自己評価との相関も比較的高いです。私はこの学生の自己評価に意味があるのかと思っていたのですが、学生への客観的評価と相関があることを感じています。PROGテストはSSの授業効果を確かめるために、今は1年生前期で実施していますが、2年生や3年生の実施も検討しタイミングも工夫していきたいです。

③採用プロセスがしっかりしていると思われる大手企業内定者の方が高知・四国などの地元の企業内定者よりコンピテンシースコアが高い結果となりました。

④学生の自己発見・目標達成に向けたステップ作り、基礎力アップの確認などにおいて、PROGテストに対する学生の関心・期待は高いです。

⑤PROGテストは教員・学生の双方に、学習の効果を確認する上において、多くの気づきを与えてくれます。

⑥2011年トライアルを導入してこのような結果を得られたので、学内での発表をしながら、PROGテストを継続的に実施して、①PDCAサイクルによるFD、それから②学生の主体的な目標達成に向けたステップ作りにつなげたい、このように考えています。